



賀川豊彦

日本の社会運動家の草分けとして知られる賀川豊彦（1888〜1960年）が、関東大震災の復興支援に当たる決意を表明した詩の掛け軸が、26日までに見つかった。賀川豊彦記念・松沢資料館（東京・世田谷、加山久夫館長）が確認した。全集などにも収録されておらず、賀川の受けた衝撃と、救援への使命感を

「私等は甦らされた」

物語る貴重な資料だ。

掛け軸は「血がこみあげてくる、永遠に若いおまへの血が、おまへの血は私の血だ、おまへは死んだ、そして私等は甦らされた、誠におまへの途は尊い途で有った 私はおまへのために六千度の太陽の熱を受ける」という詩に、「一九二三年九月 賀川豊彦」の日付と署名がある。

同館によると、3月に

関東大震災 復興決意の詩

社会運動家・賀川豊彦 掛け軸を発見

古書店から購入し調べて

が、この書では楷書体。いた。押された落款は賀川が当時、活動拠点だった神戸で使っていた印で、賀川が、ていねいに書いたことが分かった。賀川が、妻のハルなど身近な人の人々を呼ぶ尊敬表現で、牧師の賀川がキリストによる罪のあがないと



賀川豊彦が救援の意思を表明した詩の掛け軸

賀川豊彦 社会運動家、キリスト教伝道者。神戸市生まれ。旧制徳島中、明治学院、米プリンストン大などで学ぶ。神戸市新川で暮らしながら、伝道や貧困救援活動に従事。その体験などをもとにした自伝的小説「死線を越えて」は、3部作で計400万部のベストセラーに。関東大震災後、活動の中心を東京に移した。労働争議、農民組合の結成、協同組合の組織化、平和運動などに尽力。その名は特に欧米で知られ、ノーベル文学賞・平和賞の候補にもなった。

本を指したとみられる。月から東京・本所で、炊き出し、布団や衣服の配給、入浴サーピスなどを始めた。失明の危機を何度も乗り越え、被災者の自立支援のために立ち上る。震災の翌日、材木などを始め、被災者の自立支援のために立ち上る。震災の翌日、材木などを始め、被災者の自立支援のために立ち上る。震災の翌日、材木などを始め、被災者の自立支援のために立ち上る。

陸した横浜から徒歩で東京に入り被災状況やニーズを調べ数日後、神戸に合、病院、社会福祉法人戻った。その後、約1カ月に発展している。掛け軸月間、西日本各地で義援金は集めるため講演。10別展で展示されている。